

*この作品は、長崎喫茶おやじの会主催「コーヒーにまつわる作品」(平成19年10月1日)優秀賞受賞作を訂正・大幅に加筆したものです。

続

珈琲の思い出

鈴木優子

51

と、そこに夫の義弘が風呂から上がってきた。
「ど、どうしたの？優子？」

携帯を片手にベッドに突っ伏して泣いている優子を見て慌てて声をかけてくる。

すっかり油断していた優子は慌てて身を起すと、

涙を手の甲でぬぐって、答えた。

「何でもないよ。ちょっと仕事で疲れちゃって・・・。」

「そうなんだ、優子、がんばり屋さんだもんな。新しい店長さんになってから大変だって言ってたじゃない？」

義弘が優しく優子の髪を撫でながら、優子の顔を覗きこんでくる。

思わず目をそらしながら、

「うん、そうなの。」と優子は答える。

「ヨガ教室に行くのもいいけど、少しはうちでゆっくりした方がいいんじゃないの？」
そう言つて、唇を近づけてくる義弘の胸を優子は「やめて！」と思わずそうきつく言つて押しつけてしまった。

「ごめんね、私もお風呂に入ってくるね。」

そう言いながら携帯を片手にバスルームに向かう優子の携帯がメールの着信で光っているのを義弘は見ていた。

(続く)